

# 松平家史料展示室 企画展 没後100年 福田源三郎と郷土の美術

- 主催 福井市立郷土歴史博物館
- 会場 松平家史料展示室
- 会期 令和3年8月5日(木)  
～10月5日(火)

福井ゆかりの歴史上の人物は、継体天皇、<sup>たいちよう</sup>秦澄大師にはじまり、新田義貞や朝倉義景、柴田勝家、結城秀康など、数多くを挙げることができます。今回取り上げる福田源三郎は、明治時代に、福井の先人の事績を丹念に発掘・研究し、史資料を収集し、一大著作『越前人物志』に結実させました。福井の歴史を語るとき、歴代の研究者が第一に参照してきた基本資料であり、今もってその価値はゆるぎない、郷土研究の金字塔です。

本展では、福田源三郎の郷土研究の足跡を、特に美術作品との関わりに注目して紹介します。

## 第1章 郷土研究の始まり

福田源三郎(号:菱洲)は、安政4年(1857)11月22日、福井城下の新片町(現春山2丁目)に、福田藤三郎の長男として生まれました。代々扇製造業を営み、能装束の装飾や漆細工なども手がけ、藩の御用を勤めました。家は「高田屋玉雪堂」を名乗り、老舗として、また資産家として町内の信用が篤かったといえます。源三郎は幼少より学問を好み、福井藩儒・伴閑山に漢籍を学び、<sup>かわつをおり</sup>河津直入に和学を学びました。その他にも書、画、茶道、数学、詩文、俳諧、盆景、南画などの師につき、生涯にわたって学びを続けました。源三郎の身に付けた豊かな教養は、『越前人物志』の驚くほど広範な分野の収録を可能にしたと言えるでしょう。

源三郎は、郷土をくまなく探索し、埋もれた石碑を記録し、史資料を収集し、時には写生に残しました。そして家督を継いだ明治18年(1885)頃、越前ゆかりの歴代の人物伝を執筆することを決意します。同28年、荒廃していた丹羽長秀の墓所を突き止め、同志と共に再興し、同32年には橋本左内の墓所の改修に尽力しました。

明治35年、九十九橋北(現中央3丁目付近)に起こった火事によって、源三郎の収集した郷土の歴史的な資料や制作していた屏風(越前屏風)、書き溜めていた草稿の大半が燃えてしまいました。しかし、わずかに残された草稿を手し、源三郎は執筆を再開します。同37年、代々の土地・福井を離れ、東京へと転居しました。これは、相当な経費の予想される『越前人物志』の出版をも見込んでのことでした。



福田源三郎(明治43年) 当館蔵

## 第2章 『越前人物志』の出版と「越前屏風」再興

東京では、それまで以上にさまざまな分野の人々と交流の幅を広げます。転居して間もなく、当時、拡大確立期にあった「考古学会」などに参加し、論文を投稿しています。福井在住時から仕事で京都や大阪へ行く際には、本業よりも古美術観賞を優先した、と本人が述べる通り、もともと扇子の販売や注文制作を通して、幅広い層の顧客を相手にする素地があった上に、これら考(好)古家との交流を通して、そのネットワークをさらに広げていったものと思われます。

源三郎の企画から20余年を経て、稿を積み重ねてきた郷土の人物伝の出版に、思いもかけないチャンスが舞い込みます。明治42年、大正天皇(当時皇太子)の北陸行啓の機会が訪れ、当時、日本赤十字病院長・東宮侍医であった橋本綱常は、郷土福井の人物を集めた歴史書を献上したいという希望を、同郷の医学博士・土肥慶蔵に伝えました。土肥は、すでに交流のあった源三郎を推薦し、資金面では同郷の実業家・山本条太郎の支援を取り付け、『越前人物志』の出版が実現に至ります。源三郎は寝食を忘れて執筆・編さんに尽力し、行啓の翌年『越前人物志』が完成しました。

『越前人物志』は、古代から明治42年までに没した630余人を収録した大著です。それでもなお、源三郎は不足を補うため、また明治42年以降に没した人物を収録した『越前人物志 補遺』の編さんを企図していました。そして補遺の編さんに取り掛かるとともに、先の大火で失った「越前屏風」の“再興”を目指し、再び、郷土の先人の墨跡絵画の収集に取り組みます。そして、ついに「越前屏風」が完成し、大正9年(1920)4月24、25日、福井市日本赤十字社支部において、展覧会を開催しました。翌10年9月、かねてからの病が進み、念願を果たし力尽きるかのように永眠しました。享年65歳。



福田源三郎筆 蟹行列図(部分)  
(大正3年) 当館蔵

# 第3章 福田源三郎と郷土の美術

「越前屏風」は、六曲一双の書画貼交屏風で、郷土の先人の書画が170点余り収録されています。また「南越帖」は、統一した色紙に、源三郎が直接に交流した人々の書画200点余りを張り込んだ三冊の折本です。これらは、源三郎が交流した人々の確かな痕跡であるとともに、書画の配置や装丁には、源三郎の志向が反映された美術作品と言えます。いずれも一応の完成をみていますが、書画に添付された題箋には作者名の記されていない箇所も残され、永遠の未完成作品とも言えるでしょう。源三郎は、若き日に記した『白山道の記』の序文に「後年、白山登山をしようとする人は、実地に照合して、より詳細なものにしてほしい」という旨を記し、自著の増補を希望していますが、『越前人物志』をはじめ、「越前屏風」「南越帖」といった源三郎の大事業は、まずは同時代の人々に大きな益を与えるものであり、また時代を超えて後代の人に思いを託す、という源三郎の信念が反映されているように感じられます。

## 参考文献

土肥慶蔵「郷里の亡友 福田菱洲」『鶉軒遊戯』昭和2年6月発行

川端太平「福田源三郎」(福井県文化誌刊行会編『我等の郷土と人物』昭和31年1月発行)

青園謙三郎「“郷土愛”の信念に燃える福田源三郎」(福井新聞社編『福井人物風土記』昭和48年6月発行)

## 企画展「福田源三郎と郷土の美術」展示作品一覧

No.	名称	制作者	員数	時代
<b>第1章 郷土研究の始まり</b>				
1	福田源三郎略年譜	福田堅三	1巻	昭和45年
2	扇子店高田屋のれん		1枚	明治29年頃使用
3	福田源三郎写本「慶永公御行状記」	福田源三郎	1冊	明治7年8月
4	『白山道の記』	福田源三郎	1冊	明治21年9月
5	『越前大野郡谷村春日祭 豊年踊』	福田源三郎	1冊	明治21年9月
6	風月三昆面銀瓶	下地：藤本長養齊 画工：滝和亭 彫工：香川勝廣	1点	明治時代
7	左内墓所改築感謝状	橋本綱常	1巻	明治33年4月
8	橋本左内所用桐製書物箱		1点	江戸時代末期
<b>第2章 『越前人物志』の出版と「越前屏風」再興</b>				
9	『越前人物志』上・中・下	福田源三郎	2冊	明治43年7月
10	瓦仏	伝泰澄大師	1点	
11	丹頂鶴香合	武田以了	1合	弘化4年
12	『越前屏風再興・越前人物志補遺・越前人物志目次』	福田源三郎	1冊	大正7年6月7日
13	福田源三郎著作草稿(雪のかきよせ)	福田源三郎	一括	明治末年～大正10年
14	『入越記』	福田源三郎	1冊	大正4年4～5月
15	『日本扇子史』草稿	福田源三郎	1冊	明治末年～大正9年頃
16	夕映都鳥図	長田雲堂	1幅	明治～大正時代
17	山水図	福田源三郎	1幅	大正3年
18	蟹行列図	福田源三郎	1幅	大正3年
19	『鶉軒遊戯』	土肥慶蔵	1冊	昭和2年6月6日
20	『福井県丹生郡人物誌』	山田秋甫	1冊	大正元年9月20日
21	『橋本左内言行録』	山田秋甫	1冊	昭和7年9月30日
<b>第3章 福田源三郎と郷土の美術</b>				
22	越前屏風	福田源三郎編	6曲1双	大正9年4月
23	南越帖	福田源三郎編	3冊	明治末年～大正10年
24	蓮花形筆架	島雪斎	1点	幕末～明治時代
25	黒檀製靈芝形筆架	島雪斎	1点	幕末～明治時代
26	伽羅木白衣観音線香立	島雪斎	1点	幕末～明治時代
27	黒檀製観音形筆架	島雪斎	1点	幕末～明治時代
28	鐺	記内	1点	江戸時代
29	鐺	記内・明珍合作	1点	江戸時代
30	鉄製龍文鎮	伝明珍吉久	1点	江戸時代前期
31	鉄製海老文鎮	伝明珍吉久	2点	江戸時代
32	鉄製龍置物	伝明珍吉久	1点	江戸時代前期

※資料保護のため、会期中に展示替えを行います。作品No.は展示順序とは異なることがあります。

展示解説シート No.143

令和3年8月5日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1

電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489

担当 佐々木佳美

印刷 (株)宮本印刷

## 次回の展示

松平家史料展示室 秋季特別展 帰ってきた平家物語絵巻

令和3年10月9日(土)～令和3年11月23日(火)